

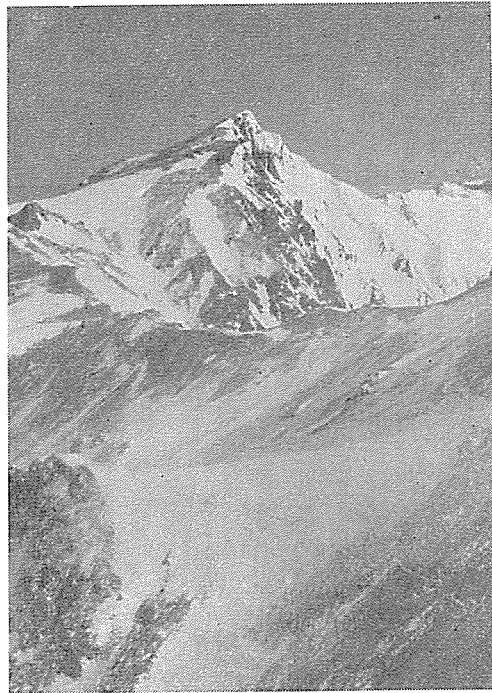
THE KANSAI UNIVERSITY BULLETIN

Osaka, May 30th, 1957. No. 303

關西大學學報

昭和32年5月 第303号

昭和二十六年十月十五日第三種郵便物認可
昭和三十三年五月三十日発行（毎月一回三十日発行）
通巻第三〇三号



白馬岳の雄姿

關西大學學報局

關西大學圖書館所藏

大阪周辺の村落史料

關西大學法制史學會 編
關西大學經濟學會經濟史研究室 編
關西大學 刊行

近世村落の研究と藩政史、郷土史、町村史とは自ら異っている。かつて郷土史の研究が盛に行われたときがあるが、近頃では農村構造、村落自治、封建的家族構成、新田開発若くは地主制等が各地の実証資料によって学問的に取上げられるようになってきた。特に近世農民生活の実態を明かにするための近道は、庄屋文書といわれる庄屋の蔵に放置されていた記録を整理することである。これらのなかには庄屋自身の任命、退役から觸、達、回状、農民の五人組、宗門改、検地、耕作、年貢、水論、新田開発等よりもより田畑建物の売買、質入、奉公人、人身売買、縁組、相続遺言、往來手形、寺送り村送り等に至るまで百般の法律行為に關する文書までが保存されている。近世農民の法律および社会経済生活はこれらの史料によって明かにする

ことができるというよりも過言でない。特に大阪を中心とした周辺村落には鄙地農村と異った特色が見られるであらう。

幸い本学図書館史料室には大阪を中心とした撰、河、泉、と大阪町方の近世文書が多く集められているので、これらを主題別に編集し活字にして刊行した「大阪周辺の村落史料」はこれらの研究活動に参加するというよりもむしろ問題の早めに取り上げたものとして関係学会に大きな貢献をなし得たもの一つであって、現に東京大学、その他全国大学を初め、文部省史料館、国会図書館、新聞社、郷土史研究会などより所望され、それぞれそれに応じている。なおまた、同書中に図版として掲載された古文書の写真は、「日本むかしむかし」第六巻「村と町むかしむかし」(角川書店・昭和三十一年刊・一九五頁)などに転載されている程である。

なお、現在までに刊行されたのは次の通りである。

第一輯 庄屋留書

庄屋は常に奉行、代官と農民の間に立っていたので、自己の日記や各般の願届類を書残しておいた。第一輯に選んだのは訴訟に關する書類の多い河州松原村、摂州味吉村、耳原村の庄屋留書である。

第二輯 耕肥、拝借銀、頼母子

農耕の基は肥料にある。その購入資金と入手方法に払った農民の努力と法律関係および金融、とくに御発起無尽と称せられる藩政頼母子は領主、町奉行、代官が、これを運営して巧妙な利を計ったことが明かにされる。

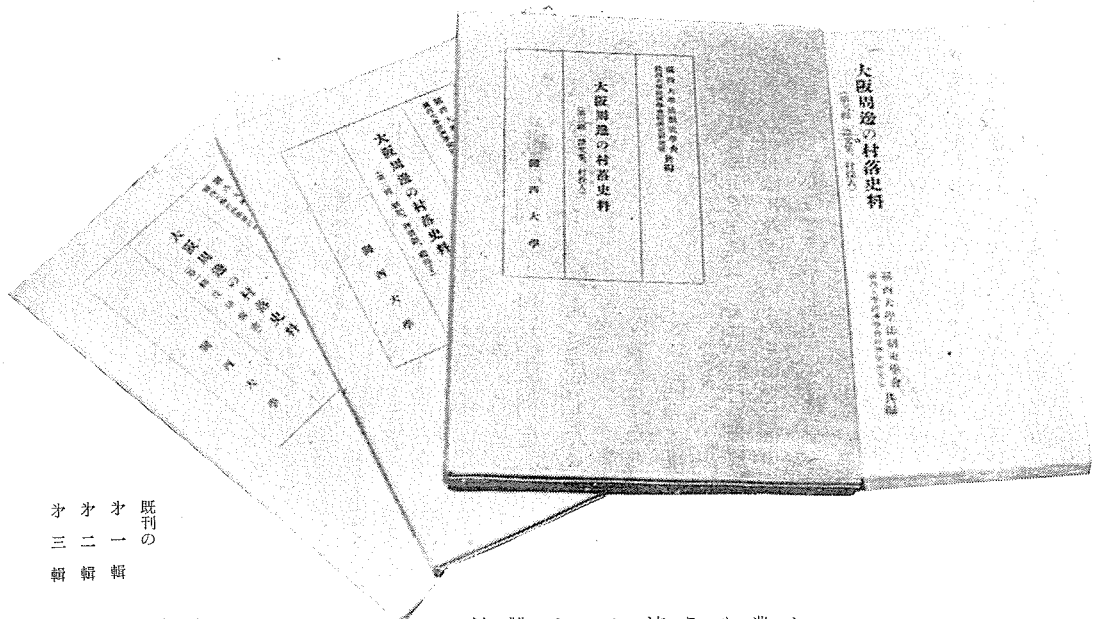
第三輯 證文 集

財産法、身分法に關する各種の証文類を分類する近世庶民法における法律行為の類型を理解することができる。第三輯は庄屋文書中には必ずといって良い程、残存する各種の書式集を取録する予定であったが、農民が自らの判を押し、自らの財産を処分し身分法上の行為をした実際の証文類によって、書式集以上の目的を達すべく試みた。

編集の方針についてはいろいろ意見があることで、一応問題を分けて資料を集中することにしてきたが、何分多量の文書のうちから選択して取録することであるから、同種文書のうちから問題毎に一二を採録し得るに過ぎず、また洩れたものや編集後に集められ史料室に入れたものなど取録できなかったものもある。

近世大阪の資料としては町方文書が多く紹介されていないので本学法制史学会、経済史研究室では、近く町方文書のみを特集したい意向である。——と学会の担当者は語っている。

「大阪周辺の村落史料」に対してはいろいろ御批評を頂いているが、この機会に、各方面から寄せられた御好意に謝意を表し、特に、宮本又次博士(大阪大)、阿部真琴助教授(神戸大)、西岡虎之助教授(早大)の御批評を原稿を頂いた順に、掲載することにした。



「大阪周辺の村落史料」について

大阪大学教授
経済学博士

宮本 又次

近畿農村は、その進歩性の故に近時歴史学徒の多大の関心を惹き、これに関する多彩なる研究成果が続々とあらわれて来ている。綿作・菜種作を以て商業的農業を展開して来た大阪周辺農村が江戸時代の農村構造や社会体制の変動の上に果たした役割を丹念に分析しようとする努力は、いまや社会経済史や法制史の一つの流行といってもよい位になっている。しかし乍ら史料に即した実証的研究が多く現われている割に、史料そのものを科学的に整理配列しようとする試みは遺憾ながら、なされていないようである。史料集の上梓程に苦難にして費用のかかる事業はまずあるまい。関西大学法制史学会と同大学経済学会経済史研究室の共編にかかる史料集「大阪周辺の村落史料」はこの多難の道に

大阪町方の近世文書が多く集められているので、同大学の上記の二学会が協力して、その老大な資料から第一期分として次の如き史料集を逐次刊行されることになった。第一輯 庄屋留書、第二輯 耕肥、拝借銀、頼母子、第三輯 証文集、第四輯 五人組帳、第五輯 宗門人別帳。その中第一輯は三十年九月、第二輯は三十一年七月に既に刊行され、われわれの眼福をこやすことになった。第一輯には訴訟に関する書類の多い河州松原村・摂津味舌村・耳原村の庄屋留書を選んでいる。庄屋は常に奉行・代官の間に立っていたので自己の日記や各般の願届類を書残していたのである。鑄方貞亮博士と春原源太郎氏の懇切をきわめた解説がある。大阪町人法の影響下にある周辺農民の私法についての特色が窺われて学問上興味があるし、殊に裏作としての菜種作に関する諸問題を録していて、先進地農村の実相を知る上に有益である。農耕生産に欠くことの出来ない肥料についてはいろいろの問題がある。耕肥入手のための資金、菜種売払代銀・貸附銀等がそれである。第二輯はこの片鱗を窺うに足るものをなめている。その肥料購入の資金と入手方法に払った農民の努力と法律関係及び金融は興味深く、とくに御発起無尽と称せられる藩政頼母子では領主・町奉行・代官が、これを運営して巧妙な利を計ったことが明らかにされている。下屎・干鰯・油粕とりわけ大阪周辺農民が大阪の町家について汲取った下屎の問題は重要であると共に、その史料は熟読玩味するに値いしよう。春原氏及び津川正幸氏が解説を附されている。第一輯は原本の順序にならい。第二輯は項目により適宜に配列している。校訂は厳正であり、編集の手きわは鮮かである。春原氏の献身の努力を多とすると共に協力された各位

既刊の
才一輯
才二輯
才三輯

の加餐を祈り、遂次第一期の計画が順調に進行することを祈る。本書は関西大学の研究用に非売品として刊行されたものであるが、希望者には特別に頒布されることになっている。江湖に薦める所以である。

宮本又次氏

明治四十年 大阪に生る
昭和六年 京都大学経済学部を卒業
彦根高商、京都大学講師、九州大学教授を経て、現在大阪大学教授で本学、神戸大学、等の講師を兼任、又社会経済史学会の理事をつとめる。
専攻 日本経済史、経済学博士
主著 株仲間の研究 フランス経済史概説 日本近世問屋制の研究 続日本近世問屋制の研究 商業的農業の展開 近畿農村の秩序と変遷 (文化人年鑑による)

大阪周辺の村落史料を

読んで感じたまま

神戸大学助教授

阿部 真

農村史の研究者にとっては、旧村の現地を歩きまわることが日課になっている。その地域は市街地化したところも、いまでも農村のところもある。ことにそのような農村の環境は、広々とした田園の風物で楽しさを与えるし、またそれこそ無言のうちに研究の助けをしてくれている。しかし、一面にはこのような探訪の楽しさをもちながら、わたくしがいつも考えるのは、各地に散在し、また滅失の危険にさらされている資料を、系統的に整理し、学界の共同の利用に供する方法、そのための協力組織である。つまるところは、大規

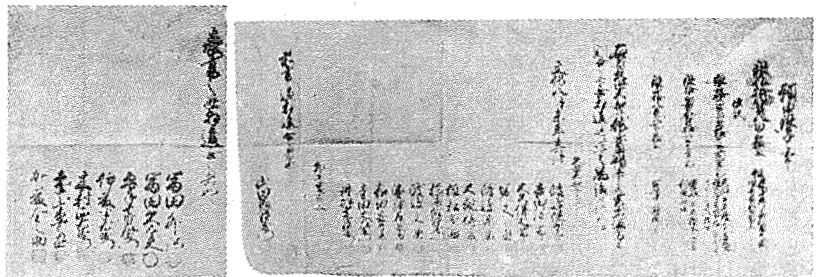
模な資料集成の刊行を思いつくが、これがまた順序・方法を考えるだけでも、容易なことではない。関西大学がまさにこの大事業に着手され、その手はじめの成果として示されたのが、この「村落史料」既刊三輯である。なお、第四輯五人組帳・第五輯宗門人別帳の続刊が予定されている。これは研究者が、おそらく誰もが何かの形で心に描いたことだろう。

各輯に収録されたのは、最近関西大学図書館が収蔵された農村庄屋史料である。その収蔵の内容は、各輯巻末に分載された目録で知られる。これで見ると、撰・河・泉にわたる村々にわたり、ことに一〇ヶ村ほどについては、一村として集積されている。すなわち、島下郡味・舌上・太田・耳原・三宅・内瀬・西成郡天王寺庄、茨田郡門真二番、丹北郡松新堂・東瓜破の諸村である。これらは撰・河の水田地帯・綿作地帯・山手・平場、また所領関係では代官所と高槻・芝村・館林・小田原・安中

琴

・一橋・田安諸家にわたる。図書館の収蔵はさらに多方面に集められているのであろうが、これまで示されただけでも、大阪周辺地域の資料としての骨髄はできかけている。いまそれが、ぼつぼつと刊行資料集として公開されはじめたというわけである。

研究者としては、第一にこれらの資料が村ごとに集積形態のまま、できるだけ多く印刷されることが望ましいだろう。しかし、第二には資料の形態、あるいは問題で分類する方法もある。いまだたい後者の方法で編集されている。従って、現在の段階では、収録された資料の利用のためには、未刊分の閲覧を要することも免れないが、これは続刊の進捗とともに、



しだいに補われるわけである。なお分類の仕方、さらに校訂などについて、言及すべき点もあるが、すでに紙数も超過したので、すべて省略する。ただ一つだけ望蜀の感をのべれば、できれば個々の文書について出所を明らかにし、それぞれ文書の何郡何村に関するか、明示する方法を講じていたいただきたいことである。いずれにしてもわたくしはこの資料集をすでに有益に利用させていただいており、編集者の御努力には感謝のほかはない。

阿部真琴氏

明治四十一年十一月 東京に生る
昭和六年 東京大学文学部国史科卒業
略歴 鹿児島県史編纂委員 東大嘱託等を歴任し、現在神戸大学助教授として同文学部に勤務
専攻 日本史
主著 世界歴史大系、日本近世史、新日本史講座―封建社会後期の宗教等々を執筆、大阪周辺特に摂津海老江、河内門真等に残存する史料の調査研究を行なっている。
(文化人年鑑による)

近世農村の歴史を知るために

早稲田大学教授

西岡虎之助

現在の日本の歴史学界で、いちばん新しい研究の対象となりつつあるのは、近世は徳川封建時代の究明である。それも従来のような幕府・諸藩とか武士層といったぐあいの支配者がわの場合でなく、百姓・町人・職人・賤民というような庶民の場合についてである。

もちろんこれらは、これまでにも研究されて来たり、また現在では、古いころの考古学の方面とか、中世の荘園関係のこととがらとか、近代史ないし現代史の諸問題などの究明が極盛であるかのようである。が、この近世の庶民層の究明が、新たに歴史学界の関心の的（まこと）となりつつあり、しかも将来性を大きく約束されつつあることは疑を容れない。

ところでそうした近世の庶民層の歴史の材料——史料であるが、とくに近世の庶民の大部分を占める農民関係の史料であるが、それは全国におびただしく散在していて、研究する場合に、ひじょうに不便であるというのが実情である。ほんとうに研究に従事する前に、この史料集めに、まずくたびれてしまうというありさまである。

そこでこの近世の農民や彼らの住む村落に関する史料が地域別に、ぼつぼつ集められ刊行されつつある。「大阪周辺の村落史料」も、その一つの現われであり、それらのうちの、もっともすぐれたものである。その既刊分は三冊であるが、以下だんだんと続刊される筈である。

第一輯は庄屋留書であって、河内国松原村と、摂津

国味舌村・耳原村などの各庄屋が、村長としての自分の日記や、いろいろな訴訟について書留めておいたものを集めている。第二輯は、大阪周辺の諸藩ないし諸郡村における肥料の問題とその購入資金にからまる藩からの拝借銀や、藩の「御発起無尽」——頼母子に関する、村民がこつ藩主・町奉行・代官などとの交渉文書を集めている。

第三輯は證文集である。当時の農民が自分の判形をおしたものの、自分の田畑など財産を処分したもの、また人口調査に関するものとか、遺言（いごん）とか、分家・相続・養子・身売に関するもの、旅行や宗教に関するもの、および村役人に関するものを収録している。それも農民の実生活から浮きあがった法律的な書式集ではなく、実際に彼ら農民が体験した證文類ばかりに限って集めている。

以上は、ごく大まかに見ての、この史料集めの内容である。その場合に、全体を通じて、各史料に関連をもつというか、統制的地位を占めるといおうか、ともかくそうした関係から、分量的にも多いのは、庄屋関係の文書である。庄屋は当時の村長格の職掌をもっていたのだから、これは当然のこととがらではある。

わたくしは、今でもそうであるが、前々からこの庄屋にひじょうに興味をもっており、一、二それに関する研究も発表してきた。荘園村落から近世村落、もしくはそれぞれの環境に生活する農民の転身にあたって、その橋渡しに、大きな役割をもったのは、庄屋であると考えている。それだけではなく、庄屋は一おう当時の農村における唯一ともいへべき教養人であった関係から、近世農村なり村民なりの性格付けにも、働きかけるところが大きかったというべきであろう。

そんなわけで、この史料集は、たいへんありがたいものである。それは、たんにわたくしだけの場合ではなく、ひろく近世の社会経済史を志す学徒、およびそれに興味をもつ人々にとっても同様である。各冊ともに、春原源太郎氏の解説がついている。それは通りいっぺんのものではなく、研究的に内容をていねいに紹介されている。したがってこの解説を通読しただけでも、大阪周辺の農村の事情とか、都市大阪との関係がどのように結びついていたかなどを、理解することができる。

校正また厳密である。ただそれはわたくしも疑問としていて、したがって解答できないが、たとえば人名の「と勢」とか「か年」などの場合に「とせ」・「かね」と現在風に、表現しても、さしつかえないのではあるまいか。というのは、ほかの変態仮名は、すべて現在流に改めているからである。この点は、べつだんこの史料集における欠陥とか間違いというわけでは、むしろない。むしろわたくしが、こうした場合に、日ごろ迷っているから、教示にあずかりたいため、あえて取立てて述べたまでである。

西岡虎之助氏

明治二十八年五月 和歌山に生る
大正十年 東京大学文学部国史科卒
略歴 昭和二十九年東京大学史料編纂所少三研究部長を退官するまで、「大日本史料」の編纂に従事、同時に大、日、大、日本女子大各講師を兼任。
又昭和二十四年に「民衆生活史研究」で毎日出版文化賞をうけた。
専攻 日本経済史
主著 新日本史図録、荘園史の研究、日本文学における生活史の研究。（文化人年鑑による）

ミシガン大学派遣日本留学生

W・J・チャンプリン

御無沙汰致しまして申し訳はございません。最近色々難用で忙しくなつて其の上埼玉原へちょっと旅行してました。

先に「大阪周辺の村落史料」に関する私の感想については少し困つて居ります。未だ其の史料を読む暇はなかつた訳です。今の段階では実に字のくずした書類が読めない以上活字にしてある国史文書を読む能力さえも非常に浅いから実質的な書評が出来る資格はないと存じます。村方史料の書式特に候文其の物を伴読するには今まで私は出来るだけ活字にされた史料を集めて来て其の理由で貴方の編纂された二輯も慇懃かつたのです。此の史料は文書の言葉使いを理解される武器としての価値以外に私にとつてはなる程国内の隔てた地帯の特殊問題、其の類似点又は其の發展過程の喰い違いを照す役割を果します。外国人として何時までも言葉と云うものが日本史の研究において最大な障りである特別に各地方の違つたお国言葉とその地方的意味に相違ありません。各地方に触れる徹底的な郷土史辞典或は事典が出来上るまで門外漢の研究者は常々不安定な気分を感じずに置かない。でもどんな立派な辞引と参考本はあるとしても外国の歴史家は結局地方的の事を十分に伴るには未だ日本の学者との直接連絡や協力に依頼するより道はないです。

チャンプリン氏

米國ケンタッキ州生、一九四三年兵役のため同州某市立大学二年退学（スペイン語専攻）、四五年より一ヶ年半陸軍言語学校で日本語勉強、終戦後日本に派遣一ヶ年半程滞留、帰米後同記専攻終了、五一年ミシガン大学日本研究所に入学、大学院生として日本歴史専攻、五六年フルブライト財団の留学生として再び渡日、東京大学研究生となり、目下埼玉県下特定村の調査、目的は天保十年頃より明治二十三年頃までの土地所有の変化と小作人の生成である。

「大阪周辺の村落史料」

を利用しながら感じた事

尾崎行也

「善兵衛懽善蔵義亡父善兵衛存生中兼而見習罷在右鉢（庄屋）跡役可相勤者ニ御座候得共今少し若輩ニ御座候ニ付則百姓理兵衛と申者御高四拾石余所持仕隨分儲ニ実跡成者ニ御座候ニ付申略庄屋役目相勤實度（下略）」（大阪周辺の村落史料Ⅲ一五八頁）

この大阪天王寺庄の庄屋跡役に関する文化六年の史料をみると、庄屋跡役に「見習罷在」と云う事を理由に世襲的なものがうかがわれ反面、補佐の庄屋にたのまれたものは、重に所有高や人格が「儲ニ実跡成者」と云う事に重点がおかれている事を知る。

庄屋跡役を誰にするかと云う事は、その村落にとって重要な事柄である。そこには身分階層や経済的階層などあらゆる事情がからまるからである。それ故逆の立場からは誰が庄屋になったかは村落の実態をうかが

（4頁写真の説明）

(1) 大名の借用證文で大庄屋に宛てたものである。「借用申」でありながら證書は「預申」と書くのは一般の借用證書文例と異なる書式の慣用である。この證書の大きさは、堅約一尺三寸、横約二尺八寸の大きなものである。

（表） 預申銀子之事

Table with columns for document type, amount, and date. Includes entries like '銀九拾八貫八百三拾匁' and '但來申年々無利足巻ケ年'.

わせる絶好の資料ともなし得るわけである。ところでこうした事柄は、地域的に差があり、とかくオーソドックスな史料にのみたよりがちな我々にとっては非常に面倒なものとなっている。

実証史学の尊重、庶民史への着眼。そうした新しい行き方を一応受け入れ、身近に残された近世村落文書を紐解き、生かして行こうとする時、最も強く感ぜられる事は、それが概説史と応々一致しない事ではなからうか。これを解決するには、他所の史料を参考にする他なからう。しかもそれは入手し難いのが現状である。

こうした観点からも、「大阪周辺の村落史料」と云ったものは是非必要なものであり、及その中から新しい問題をつかみ出す事も出来ると云う見逃してはならない重要性をもっていると考えられる。さらには、その「解説」が理解を深くさせ史料の利用度を高めてくれている。そして、あらたに感じた、疑問や問題について、返答し共に考えていただけの機関が発行所の内に作られたら、読者としてこの上ない親切に思われる。（筆者は長野県田田高等学校教諭）

前書之通相違無之者也 (裏) 表書之通相違無之者也

Table listing names and locations, including 吉田 彌三郎, 大久保 定四郎, 大波 源之丞, etc.

久世大和守内 渡邊健次郎

学内報

關西大學第一高等學校増築地鎮祭 關西大學第一中學校新築地鎮祭

第一高等學校の増築工事、第一中学校新築工事の地鎮祭は、五月一日（水）午前十一時より、千里山外苑一高講堂前に於て、理事長をはじめ各役員、評議員、教育職員等関係者多数列席のもとに、吹田垂水神社神官により、厳かに挙行された。

人事移動

昭和三十三年三月三十一日付
職を解く

短期大学部	教	入江	深
同	教	宇田	米夫
同	教	太田	雞一
同	教	加藤由次郎	
同	教	佐伯	三郎
同	教	角田	文雄
同	教	富山	忠三
同	教	橋田	慶蔵
同	教	山口	辰男
同	助教	鮫江	城夫
同	専任講師	河合	信雄

同 四月一日付
本大学教授に任じ文学部勤務を命ずる
高尾 國男

山脇毅講師、橋川時雄（大阪）教授

文学博士号授与

關西大學文学部国文学科山脇毅講師、大阪市立大学橋川時雄教授は、かねて本学文学部教授会に論文を提出して博士号を請求していたが、十二月始めの教授会でパスし、四月十七日付をもって文学博士号が授与された。



山脇毅
博士

なお、博士号授与式は五月十日千里山大学ホールで行われ、各学部長列席



橋川時雄
博士

文学博士 橋川時雄

の下に、学長より同各博士に学位が授与された。

文学博士 山脇 毅

（主論文題名）
「源氏物語の文献学的研究」
（二篇）
（参考論文）

「枕草子本文整理札記」
（二篇）
（略歴）

滋賀県。明治三十七年滋賀県師範学校本科卒業、大正八年京都大学文学部国文科選科生修了、同八年公立中学校教育従事、昭和三年関西大学講師、同二十八年関西大学大学院国文専攻博士課程講師兼務

（主論文題名）
「中国文史学序説第一篇読駁篇」
（四編）
（参考論文）

「陶集源流刊布考」
（二編）
（略歴）

東京都。大正二年福井県師範学校本科卒業、同八年中国文学・史学研究のため北京に遊学、昭和九年北京新民学院教授、同二十一年帰国同二十四年京都女子大学文史学科教授、同二十七年大阪市立大学文学部教授、同二十八年大阪大学講師兼務

同 四月一日付
本大学教授に任ずる

助教授 鈴木 祥蔵

同 四月一日付
本大学専任講師に任ずる

助手 上林 良一

同 四月一日付
本大学助教授に任ずる

専任講師 有阪 隆道

専任講師 小方 厚彦

専任講師 辻岡 美延

専任講師 本庄 良邦

専任講師 越後 和典

専任講師 酒井 文雄

同 四月一日付
本大学専任講師に任じ文学部勤務を命ずる

宇田 米夫

加藤由次郎

北村 守光

角田 文雄

橋田 慶蔵

丸山 三友

同 四月一日付
 本大学専任講師に任じ経済学部勤務を命ずる
 戒田 郁夫
 濱田 文雅
 山本 繁緯
 同 四月二十六日付
 本大学専任講師に任じ文学部勤務を命ずる
 加藤由次郎
 橋田 慶藏
 角田 文雄
 佐伯 三郎
 富山 忠三
 山口 辰男
 同 四月三十日付
 本大学特別研究生(文学部)を命ずる
 大倉 孝
 田宮 武

入江 深
 佐伯 三郎
 鯉江 城夫
 同 四月一日付
 本大学助手に任じ商学部勤務を命ずる
 大橋 昭一
 木田 和雄
 松谷 勉
 山上 達人
 同 四月一日付
 短期大学部専任講師兼務を命ずる
 専任講師 河合 信雄
 同 四月三十日付
 本大学特別研究生(文学部)を命ずる
 大原 豊

同 四月一日付
 本大学専任講師に任じ商学部勤務を命ずる
 河合 信雄
 富山 忠三
 吉信 肅
 同 四月一日付
 補導主事を命ずる
 教授 明石 三郎
 教授 小野 勇
 教授 鑄方 貞亮
 教授 安田 信一
 教授 山田松太郎
 教授 植野 郁太
 助教授 中 義勝
 助教授 寛田 知義
 助教授 広田 司郎
 助教授 越後 和典
 同 四月一日付
 短期大学部教授兼務を命ずる
 専任講師 太田 難一
 専任講師 入江 深
 専任講師 宇田 米夫
 同 四月三十日付
 本大学特別研究生(文学部)を命ずる
 大地原 豊

同 四月一日付
 再任を命ずる
 助手 龜井 利明
 助手 沼田 昭夫
 同 四月一日付
 本大学特別研究生(法学部)を命ずる
 北川 均
 曾野 和明
 中辻 卯一
 保田 芳昭
 同 四月十七日付
 文学博士の学位を授く
 山脇 毅
 橋川 時雄

同 四月一日付
 本大学助手に任じ法学部勤務を命ずる
 澤井 裕
 間 登志夫
 藤川 洋
 同 四月十七日付
 文学博士の学位を授く
 山脇 毅
 橋川 時雄

同 四月一日付
 本大学助手に任じ文学部勤務を命ずる
 河崎 章夫
 安川 昱
 吉田 民人
 同 四月二十一日付
 再任を命ずる
 助手 佐藤 博
 助手 重田 晃一

同 四月一日付
 本大学助手に任じ経済学部勤務を命ずる
 同 四月一日付
 短期大学部教授兼務を命ずる
 専任講師 太田 難一
 専任講師 入江 深
 専任講師 宇田 米夫

同 四月一日付
 本大学特別研究生(商学部)を命ずる
 中辻 卯一
 保田 芳昭

同 四月一日付
 文学博士の学位を授く
 山脇 毅
 橋川 時雄

同 四月一日付
 本大学特別研究生(文学部)を命ずる
 大地原 豊

学会出張

- ◇文学部末永雅雄教授は四月三日より九日まで東京大学及び上野博物館における日本考古学会及び日本考古学協会会議に出席。
- ◇経済学部東井正美助教授は四月六日より九日まで東京大学における農業経済学会に出席。
- ◇文学部宇田米夫専任講師は四月二十六日より三十日まで東京大学及び専修大学における日本地理学会、経済地理学会に出席。
- ◇法学部木村健助教授は四月二十七日より五月一日まで東京における日本私法学会、比較法学会、法制史学会に出席。

昭和三十一年度卒業論文題名

文学部

(3)

二部文学部では、毎年卒業に際し卒業論文を提出することになっているが、昭和三十一年度卒業論文として、一月十七日迄に提出された論題は次の通りである。

▼二部 英文学科

- オスカア・ワイルド 青木 範雄
- シャーロット・ブロンテ著シエーン・エアについて 石田 富美
- ハムレットの性格 内海 栄一
- シヤロツクホームズ 内田 房雄
- ハーデイ「ダーバウイル家のテス」研究 大道 義明
- ワーツワス作品研究 奥田 昭彦
- ハツクスレイの人間観 小野田 博
- サマーセツトモームの作品について 大西 慶晶
- ハムレットについて 川島 正
- シエイクスピアの戯曲「ハムレット」に於けるハムレットの言動の矛盾とハムレットの性格について 叶 兼光
- ステイブソンの人物考察とその作品論評について 金沢 寿雄

R. L. Stevensonとその作品——隨筆にみられる性格——

桂 義生

シエクスピア作、ハムレットの生涯

菊池 清之

キーツの「幻想の詩

境」 小泉 晃一

The Study of a Pronoun "it" subject to some change of the above.

小林 宏行

リチャード・シェフリーズとその作品

小橋 郁夫

「わが心の記」について

佐藤 勉

ウィレラム・ブレイク無心と経験の歌の現代性

高田 昌明

「嵐が丘」とその著者エミリー・ブロンテの性格に付いての一考察

武田 正夫

P・Bシエリーの詩及詩論についての一考察

寺井 久良

トーマス・ハーデイ著「郷人の婦り」について

中前 和子

英米語に於ける感情語句について

鍋島 直

「緋文字」についての研究

根石 哲夫

ヘミングウェイ文学の性格について

晶仲 一実

トーマス・ハーデイについて

古市 正行

◇法学部石尾芳久助教授は四月二十七日より五月一日まで東京における法制史学会に出席。

◇法学部高島義郎専任講師は四月二十七日より五月一日まで法政大学及び日本大学における民事訴訟法学会、私法学会に出席。

◇法学部福島四郎、和田豊二、明石三郎各教授、岩本慧助教授、澤井裕助手は四月二十八日より五月一日まで中央大学における日本私法学会に出席。

◇法学部池垣定太郎教授は四月二十八日より五月一日まで中央大学における日本私法学会、日本海法学会並びに同理事会に出席。

◇法学部中谷敬壽、桜田蒼両教授、内田修、堀堅士両助教授は四月二十八日より五月一日まで専修大学における日本公法学会に出席。

◇法学部植田重正教授、中義勝助教授は四月二十八日より五月一日まで一橋大学における日本刑法学会に出席。

◇商学部河野稔教授、高堂俊彌専任講師は四月二十八日より五月二日まで東京大学における社会政策学会全国大会に出席。

◇法学部池田榮教授、上林良一、原英次両専任講師、間登志夫助手は四月二十

九日より五月四日まで一橋大学における日本政治学会に出席。

◇法学部本浪章市専任講師は四月三十日より五月四日まで東京大学における国際法学会、私法学会に出席。

◇法学部川上敬逸教授、藤川洋助手は五月一日より四日まで東京大学及び中央大学における国際法学会、日本法哲学会に出席。

◇文学部鈴木祥藏教授、寛田知義助教授は五月二日より六日まで名古屋大学における日本教育学会に出席。

◇文学部岡野留次郎教授は五月五日より九日まで専修大学における日本哲学会に出席。

昭和三十一年五月三十日発行

關西大學學報 第三〇三號

大阪府大淀区長柄中通二丁目二番地

編集兼 久 井 忠 雄

発行人 久 井 忠 雄

大阪府北区川崎町三八

印刷所 株式会社 ナニワ 印刷所

電話(35) 七二七一番

電話(35) 七二八〇番

大阪府大淀区長柄中通二丁目

発行所 關西大學學報局

電話(35) 二〇七二番

振替 大阪 二六七七二番

ジュリアス・シーザー論 主としてブルータスの性格解剖について

藤本 周一

ヘミングウェイ—死とニヒリズム—

福留 晴久

Lalcaidio Hean の創作論と情緒について

藤田平八郎

リチャード三世の本質について

正木 光

The Vicar を中心とした Goldsmith の人と作品について

名井 弘明

ハムレット悲劇について 彼の性格を含む悲劇的構成

山本 寿雄

ジョージ・ロバート・ギツシングと彼の作品「ハンリンフイクロフトの私記」について

山内 永次

Charles Dickens and Hio "David Copperfield"

藪下 昌

現代言語学の探究 特に文字音韻の文化と言語言語と思想について

横江 保

ハムレットの悲劇について—性格的矛盾とその運命の展望—

米田 多良

シエイクスピア作品ハムレットより「ハムレットの性格と道化」

渡辺 弘明

ハムレット劇の展開について

渡辺 道子

▼二部 国文学科

芭蕉の艶について

青山 十郎

記紀の歌謡及び万葉に見られるヒューマニズムの問題

明智 清枝

西鶴論

青草 信威

小林一茶について

稲田 豊

元禄世相と町人生活—西鶴の描いた元禄町人大衆の経済生活—

井狩 良子

夏目漱石、我輩は猫である

今井 芳夫

近松とその作品研究

内山 修造

二葉亭四迷の「浮雲」

梅野加代子

西鶴の作品に現われた当時の社会状況について

内堀 潔

「一茶」について

上田 宣昭

中臣朝臣宅守と狭野茅上娘子の贈答歌についての一考察

越江 義沖

近松作心中天の網島に於ける女性について

岡田 誠

芭蕉の俳句とその歌枕

岡部 里生

初期の作品を通して見た漱石について

岡 光

徒然草小論「つれづれなるまゝに」の心境考察

川田 信男

太宰治論

川端 義雄

芥川竜之介論

亀山 英夫

万葉長歌—挽歌について—

川上美喜子

島崎藤村、旧主人水彩画家について

鮫島 義信

野ざらし紀行について

白木 誠

「かぐら」の語義について

徳永 允律

我が国の近代文学(小説)を主体とした農民、農村とその将来

長沢 裕

「破戒」と現代人

中井 豊一

石川啄木の短歌

中西トシ子

一葉小説女性考

中西ヒサ子

近松の人人—傾城物心中の要因を訪ねて—

中原 公

島崎藤村の「破戒」について

中元 登

田山花袋について

納庄 一朗

西鶴の町人物について

針重 稲造

芭蕉俳諧に於ける「わび」の一考察

比嘉 秀之

日本永代蔵と日本新永代蔵について

広野 勲

山本有三論

藤井 康彰

志賀直哉、エゴイズムについて

藤原 直哉

近代文学の発展について

松本 幸重

国木田独歩論

南 修

平家物語の武人造型

八切 丞男

萩原朔太郎詩の基底

八木 修

蜻蛉日記の成立について

山中 淳吉

更級日記について

矢野 脩

芭蕉私論

吉崎 照雄

▼二部 哲学科

ベルグソンに於ける直観の方法に就いて

江端 明弘

「理性と実存」に於けるヤスバースの「包括者」についての論考

小笠原 博

ゲシュタルト心理学について

太田 政

John Dewey における経験の連続について

小山 正

デュウイに於ける価値判断について

塚田 敏行

デカルトの暫定的道徳について

納谷庄一郎

デュウイに於ける思考に就いて

林 馨

ハイデッカーに於ける前走的決意性について (vorlaufende Entschlossenheit)

松井 龍雄

▼二部 仏文学科

ランボーの生涯とその作品

大川 弘光

「赤と黒」に於ける恋愛の研究

佐藤 博

カミュ文学論

橋元 文明

Pierre et Jean 及びその Preface に就いて

和田 省一

▶二部 独乙文学科

Heinrich Heine の国民性について

住田 信行

ヘルマン・ヘッセの孤独心と放浪心

筒井 源一

「トーマン・マンのトニオクレイゲル」について

平井 正明

ゲーテ「ファウスト」のグレーヘン悲劇について

矢田谷孝一

シラーウィルヘルム・テルについて

山本 和男

▶二部 新聞学科

パブリック・リレーションに関する一考察

石崎 保司

子供の生活とマス・コミュニケーション

池内 康朗

言論と自由

井上 泰治

製作上より見た新聞文章

上原弘治郎

広告の価値と社会性について

小川 義勝

新聞広告の効果

尾谷 薫

商業主義と新聞の墮落に関する一考察

小幡 節也

新聞企業と新聞価値について

大空 正治

新聞の娯楽性について

勘場 治

ラジオニュースの研究―視覚から聴覚への再構成―

合田 実

新聞文章に関する一考察

工口 良雄

民衆とマス・コミュニケーション 日の放送・ラジオ・テレビについて

佐伯 幸男

広告宣伝の社会的機能と反省

里 俊男

新聞写真に要求される諸問題

白石 正昭

新聞と警察

田畑 輯

教育的立場より見た娯楽映画

辻 昂作

新聞の文章について

とくに記事の読み手の立場から

広畑 邦男

新聞と世論の関連性、主に新聞による世論形成の過程について

町田 実孝

新聞の本質

正延 順一

放送と他の社会的共同行為について

三国 透

新聞の編集整理における技術と心理的諸問題

宮川竜太郎

新聞の色彩広告

見谷 友也

新聞にみる世論の構造新聞とその読者とのコミュニケーションについて

本園 健

選挙速報の研究(朝・毎・読比較検討)

山下 裕三

▶二部 東洋文学科

韓非子のマキヤベリズムと法治思想

島 守

魯迅について

谷中 一郎

▶二部 史学科

フランス革命における農村の状態について

相沢 照子

イタリア・ルネッサンス美術とその社会的背景について

石塚 博

日本に於けるキリシタン活動

江原 重夫

諸葛孔明天下三分の計

大中 由春

近世に於ける最下層階級の発生について(特殊部落発生史)

岡 美作

十九世紀に於ける英国経済社会と植民地との関連性について

金森 照彦

前期封建社会における御家人について

河合 昭三

中世後期の堺

黒見 哲

大阪に於ける米騒動の経過(大正七年八月)

小篠 幸治

「神戸市史古代の研究」——その日本史に於ける地位——

小林 義一

魏志倭人伝に見える邪馬台国の位置について

佐藤 弘

イスラム社会に於けるザカートの変遷について

佐々木裕子

サラセン帝国の階級制度について

新谷 隆夫

郷土史の歴史の意味について

口碑伝 竹内 和夫

説を中心とした

田中 実

徳川時代中葉以後に於ける庶民芸術と社会相について

多谷 勇

江戸時代の農民一揆について

寺尾 吉弘

中基兵衛が大和川付替工事に果たした役割

永田 弘

福沢諭吉と封建思想の批判について

中村 要

城下町と近代都市の関係について

植崎 剛

江戸時代に於ける町人勢力の擡頭

永井惣太郎

近世の教育

西瀬 寿

殖輪の起源及びその廃滅に就いて

林田 雅朗

封建的基礎の動搖——百姓一揆論——

樋口 弘衛

近世に於ける農民機構——特に隸属農民の形体について——

東野 一重

日本の公共救済 明治時代を中念に

藤野 敏夫

近世に於ける河内の農村生活

古田 満男

享保の改革

藤本 公男

維新社会の農民暴動について

前川 清彦

日本広告史(マスコミュニケーションの発展発達に伴う)

宮田 修

旧植民地統治政策下の北部植民地の商業について

森田 徹

部落民族の史的考察

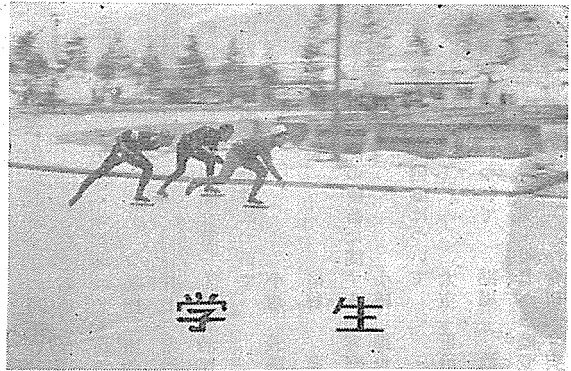
八木 公之

イスラム社会の奴隸制度

吉岡 三男

伊賀上古史より見た上野朝屋(テヨウヤ)住居址(推定)の一考察

渡辺 泰三



学生

関西六大学野球リーグ開幕

関西春季六大学野球リーグ戦は、四月二十一日西京極野球場グラウンドに於て、調でと対戦、一回戦、二回戦共打線の不立命破れ優勝を危くしたが、その俊投・打の復調に伴い、神大に連勝、同大に二勝一敗と勝ち越し優勝圏内にとどまった。

記録

一回戦 対立命 四月二十一日 於西京極
立命 000000200013
同大 000000000000
立 内橋一平 31打安失
内橋一平 31打安失
村山・前川一土田 26打安失
同 村山・内橋(立命)の好投手の投げあいとなり、本学村山投手は伸びのある速球を内外角にきめて六回まで無失点におさえたが、七回全力投球を続けてか、少し息をついた所を中坊、岡田に安打を叩きし二点をあえたえ初戦を失った。

二回戦 対立命 二十四日 於西京極
立命 000000000000
同大 000000000000
立 内橋一平 43打安失
内橋一平 43打安失

一回戦 破れた本学は必勝の信念を持って立命に對戦、戦歴はまたも村山、内橋両投手の投げ合いとなり、九回迄両軍あわせて四安打で延長戦にはいり、十回、十一回と本学は相つてチャンスに向え十回難波の拙走で、十一回一死満塁の時梅田のスクイズ失敗で絶好のチャンスをつぶし十四回岡田、平岩に打たれ一点を献上、十四回の延長の末二回戦にも涙をのんだ。

一回戦 対神大 二十七日 於日生
神大 001000001012
同大 000000001012
同 前川一土田 31打安失
前川一土田 31打安失

二回戦 対神大 二十九日 於日生
神大 000010004001
同大 000010004001
同 吉本・山内一細川 29打安失
吉本・山内一細川 29打安失

一回戦 対同大 五月四日 於日生
同大 000100001000
同 前川一土田 30打安失
前川一土田 30打安失

二回戦 対同大 五月五日 於日生
同大 000000001020
同 蔵本・橋詰一羽根田 32打安失
蔵本・橋詰一羽根田 32打安失

一回戦 対同大 五月四日 於日生
同大 000100001000
同 前川一土田 30打安失
前川一土田 30打安失

二回戦 対同大 五月五日 於日生
同大 000000001020
同 蔵本・橋詰一羽根田 32打安失
蔵本・橋詰一羽根田 32打安失

一回戦 対同大 五月四日 於日生
同大 000100001000
同 前川一土田 30打安失
前川一土田 30打安失

二回戦 対同大 五月五日 於日生
同大 000000001020
同 蔵本・橋詰一羽根田 32打安失
蔵本・橋詰一羽根田 32打安失

一回戦 対同大 五月四日 於日生
同大 000100001000
同 前川一土田 30打安失
前川一土田 30打安失

二回戦 対同大 五月五日 於日生
同大 000000001020
同 蔵本・橋詰一羽根田 32打安失
蔵本・橋詰一羽根田 32打安失

一回戦 対同大 五月四日 於日生
同大 000100001000
同 前川一土田 30打安失
前川一土田 30打安失

二回戦 対同大 五月五日 於日生
同大 000000001020
同 蔵本・橋詰一羽根田 32打安失
蔵本・橋詰一羽根田 32打安失

一回戦 対同大 五月四日 於日生
同大 000100001000
同 前川一土田 30打安失
前川一土田 30打安失

二回戦 対同大 五月五日 於日生
同大 000000001020
同 蔵本・橋詰一羽根田 32打安失
蔵本・橋詰一羽根田 32打安失

六回梅田、辻本が連続長打をなす一点、八回にも梅田、辻本の再度の安打で二点を加え、音田、前川両投手の技巧に同大打線を一点におさえ決勝にもちこんだ。

三回戦 対同大 五月七日 於日生
同大 1000101220003
同 勝山・前川・村山一土田 34打安失
勝山・前川・村山一土田 34打安失

同 橋詰・時田・蔵本一羽根田 31打安失
橋詰・時田・蔵本一羽根田 31打安失

同大は安藤の一回、三回の適時打で合計三点の先取点をあげたが、本学は四回以後七回迄毎回得点を加え、野口の逆転安打、七回原田の左中間の大三塁打等で二点を上げ勝利を決定すけ、リリーフ村山の最高調のピッチングで以後同大打線をさえ、優勝圏内にとどまった。

全関西スピードスケート選手権大会
第四回全関西インドア・スピード・スケート選手権大会は四月二十五日午後六時半大阪梅田リングで行われた。

千星(関大)選手が一マイルに3分4秒8、二マイルに6分23秒0と日本記録をそれぞれ破り、又同じく二位ながら八八〇ヤード、一マイルに小山(関大)選手も日本記録を更新した。

記録(本学関係のみ) 於大阪梅田リング
八八〇ヤード ②小山 1分29秒8 日本新記録
一マイル ①千星 3分4秒8 日本新記録
二マイル ①千星 6分23秒0
大阪陸上対抗選手権大会に優勝

大阪陸上対抗選手権大会は、五月十二日(日)小雨降る大阪市立グラウンドで舉行せられた。

本学は各種目に得点を上げ、二十種目中十一種目の優勝、八三、五点を上げ完全優勝を成しとげた。

記録(本学関係一寄記録のみ)
大阪陸上対抗選手権大会 於大阪市立グラウンド
二百米 鈴木23秒3 四百米 松岡54秒4
八百米 岡部2分9秒2 一千五百米 沢田4分27秒2
三千障害 吉田10分29秒8 四百米リレー 関大チーム45秒1
千六百米リレー 関大チーム3分45秒1
走幅跳 河野6米29 三段跳 河野13米14
砲丸投 清水11米77
ヤリ投 村49米17

なお、四月二十八日名古屋市みずほりレーカーニバルに本学も出場し全国の強豪と互し、野村選手が百米に十一秒〇で優勝した。

ハンドボール部
関西学生ハンドボール春季トーナメント大会は、四月二十七日より西宮球技場で行われ、本学は一回戦に阪大を25対3で軽く破り、準々決勝に大阪府大、準決勝に同大を破り、昨年度全日本学生大会に優勝をした関学と決勝にて対戦、前半5対2と3点のリードを許し、後半チーム全員の奮闘で3点のリードをちりちりとつめ寄ったがおよびず、2対3と一点の挽回で七対五で惜しくも破れ優勝を逸した。

記録
四月
二十七日 一回戦 関大 25(13|1|1)3 阪大
二十九日 準々決勝 関大 17(10|1|2)2 府大
五月三日 準決勝 関大 14(9|1|0)3 同大
決勝 関大 5(3|1|5)7 関学

記録
四月
二十七日 一回戦 関大 25(13|1|1)3 阪大
二十九日 準々決勝 関大 17(10|1|2)2 府大
五月三日 準決勝 関大 14(9|1|0)3 同大
決勝 関大 5(3|1|5)7 関学

記録
四月
二十七日 一回戦 関大 25(13|1|1)3 阪大
二十九日 準々決勝 関大 17(10|1|2)2 府大
五月三日 準決勝 関大 14(9|1|0)3 同大
決勝 関大 5(3|1|5)7 関学

記録
四月
二十七日 一回戦 関大 25(13|1|1)3 阪大
二十九日 準々決勝 関大 17(10|1|2)2 府大
五月三日 準決勝 関大 14(9|1|0)3 同大
決勝 関大 5(3|1|5)7 関学

記録
四月
二十七日 一回戦 関大 25(13|1|1)3 阪大
二十九日 準々決勝 関大 17(10|1|2)2 府大
五月三日 準決勝 関大 14(9|1|0)3 同大
決勝 関大 5(3|1|5)7 関学

記録
四月
二十七日 一回戦 関大 25(13|1|1)3 阪大
二十九日 準々決勝 関大 17(10|1|2)2 府大
五月三日 準決勝 関大 14(9|1|0)3 同大
決勝 関大 5(3|1|5)7 関学

記録
四月
二十七日 一回戦 関大 25(13|1|1)3 阪大
二十九日 準々決勝 関大 17(10|1|2)2 府大
五月三日 準決勝 関大 14(9|1|0)3 同大
決勝 関大 5(3|1|5)7 関学

記録
四月
二十七日 一回戦 関大 25(13|1|1)3 阪大
二十九日 準々決勝 関大 17(10|1|2)2 府大
五月三日 準決勝 関大 14(9|1|0)3 同大
決勝 関大 5(3|1|5)7 関学

記録
四月
二十七日 一回戦 関大 25(13|1|1)3 阪大
二十九日 準々決勝 関大 17(10|1|2)2 府大
五月三日 準決勝 関大 14(9|1|0)3 同大
決勝 関大 5(3|1|5)7 関学

記録
四月
二十七日 一回戦 関大 25(13|1|1)3 阪大
二十九日 準々決勝 関大 17(10|1|2)2 府大
五月三日 準決勝 関大 14(9|1|0)3 同大
決勝 関大 5(3|1|5)7 関学

記録
四月
二十七日 一回戦 関大 25(13|1|1)3 阪大
二十九日 準々決勝 関大 17(10|1|2)2 府大
五月三日 準決勝 関大 14(9|1|0)3 同大
決勝 関大 5(3|1|5)7 関学

記録
四月
二十七日 一回戦 関大 25(13|1|1)3 阪大
二十九日 準々決勝 関大 17(10|1|2)2 府大
五月三日 準決勝 関大 14(9|1|0)3 同大
決勝 関大 5(3|1|5)7 関学

記録
四月
二十七日 一回戦 関大 25(13|1|1)3 阪大
二十九日 準々決勝 関大 17(10|1|2)2 府大
五月三日 準決勝 関大 14(9|1|0)3 同大
決勝 関大 5(3|1|5)7 関学



校友 バツヂ

校 友

校友会本部の動き

校友会本部に於ては事業計画画其他につき打合せの為、左の部会をもつた。

- 四月 四日 五部長会 天六理事会議室
- 同 五日 広報部会 一中会議室
- 同 十二日 組織部会 天六評議員室
- 同 十七日 財務部会 大阪郵政会館
- 同 十八日 広報部会 鐘紡西寮
- 同 二十日 常議員会 千里山教育会館
- 五月 二日 組織部会 大洋軒グリル
- 同 六日 広報部会 天六理事会議室

常 議 員 会

四月二十日(水)午後二時から千里山教育会館に於て、二十七名出席のもとに常議員会を開催、昭和廿二年度事業計画並びに予算を決議した。

出席者

- 大月伸、大石雄一郎、長柄金吾、梅原貞治郎、大島武夫、大森俊次、寒川喜一、極本信雄、門上敏夫、金本朝一、北原元茂、坂本竜夫、千歳寛郎、中務平吉、鮎江城夫、西村治三郎、畑下辰典、久井忠雄、平沢豊一、古市実、前田軍治、三島律夫、宮崎平、村上精三、向井裕亮、逢阪勝見、下条小野右衛門

新卒前学友会幹部との懇談会

五月二日(水)午後五時半より肥後橋畔「大洋軒」に於て校友会組織部主催の懇談会を開催し、新卒業者との意見の交換を行った。

出席者

- 久井専務理事、大月伸、大石雄一郎、長柄金吾、三島律夫、坂本竜夫、古市実、前田軍治、門上敏夫、寺西武、金本朝一、阿部基吉、石丸豊、千歳寛郎、宮崎平、神屋敏民、安井章吾、飯田敏、東山武彦、坂上晋、佐々木敏山、阿部健一、喜納完敏、北岡万信、丸岡武、古本博文、尾白武志、河野敬雄、細川喜彦、吉田泰高、山崎總鮮、園田実

朝 鮮 同 窓 会

関西大学朝鮮同窓会では三月十七日(日)千日前アサヒビヤホールに於いて定例総会を開催し、会員三十数名出席のもとに岩崎学長のメッセージが朗読され、今春卒業の新入会員の挨拶、続いて歓迎の辞などあつて、母校及祖国との連絡其他組織強化について種々論議したのち、左の如く役員を改選、陣容を一新して在日全会員を包含し、活潑な活動を展開することにまつた。

役員

- 顧問 岩崎卯一
- 相談役 金長松 李慶泰 朴燦時
- 会長 金普根
- 副会長 吳辰成 吳昌根
- 幹事長 金元河

神 戸 支 部

支部役員として多年その運営に尽力せられた、神戸地裁判事岡田退一氏が京都地裁に栄転せられたので、四月十日(水)



神戸地裁判事岡田退一氏(中央)の栄転祝賀会

午後六時より、「北京桜別館」にて同氏の敬送祝賀会を盛大に挙行政した。

尚、会員住友銀行取締役神戸支店長丹羽英夫氏は名古屋支店長に栄転せられた

出席者

- 来賓 岡田退一
- 山崎敬義、原田鹿太郎、西村治三郎、下条小野右衛門、水本信夫、福地寿三、土井美弘
- 大塚俊勝、向井裕亮、難波芳水、水本千代松、橋本太一、岡本徳、長嶋隆成、貴客喜伴、貴村一雄、照繁造、奥村孝、榎本昭、赤剣正夫、野田俊春

岩 岸 氏 研 究 発 表

岩岸巖氏(帝國工業電機株式会社取締役社長・大12大商・大15大法卒)は同社多年製作の

機器に関し研究論文を起草、左記の通り公表した。

三相整流子電動機の寸寸法と誘起電圧の考察
(新設計法の一部) 電気学会四月号

交流電気動力計の理論と計測

東京大学・日本計測学会四月号

記念植樹申込者(その七)

五月十日現在

- 豊中支部 楠 一本
- 東京支部 中山 幸市 山 桜 十本
- 森田 稷 ニーカリ 一本
- 沢田 勇夫 山 桜 一本
- 累計 三本 ヒヤラキ杉 一本
- 山桜 百八十六本 ニーカリ樹 十一本
- 銀杏 十四本 メタセコイヤ 十一本

昭和31年 校友名簿

在学時代の友を想うよすがに、また、卒業後の親睦連絡に、この一冊を備えて利用下さい

— 収載人員二六、〇〇〇余名 —

B5判 六〇〇頁
実費頒価五〇〇円
(送料当方負担)

申込先

関西大学校友課
大阪市大淀区长柄中通二丁目
振替 大阪 二八七五番

記念植樹募集

昨秋創立七十周年を記念して施設の拡充を図り、千里山及び天六両学園に近代建築の学舎を完成し得ましたことは洵に御同慶に堪えません。

さて、この構築美に配するに樹木や芝生の景観美を以てし、造園技術の粋をあつめて、教育環境を形成することは、日々これに接する学生達にあるいは憩いの、あるいは思索の場所を与え、学習研鑽の資となるべく、また、学窓を出でては学舎と共に、一本の樹木にも母校への思慕の情を抱かしめるであります。

かかる教育環境形成の重要性に鑑み、本学では植樹造園に付とめたいと存じておりますが、また有志の方々からこの趣旨に御賛同下されて樹木の御寄附にあづかり得ば幸甚に存ずる次第であります。

昭和三十三年三月

關西大學

何卒右趣旨に御賛同を賜わりまして、単価表により樹木御指定の上左記宛御申込下さいます様御願申上げます。

一、樹木単価表

イ、楠	(高さ十尺、巾七尺、太き目通一尺) 老本一〇、〇〇〇円
ロ、銀杏	(高さ七尺、巾三尺、太き目通四寸) 同 三、〇〇〇円
ハ、山豆ハゼ樹	(高さ八尺、巾五尺、太き目通六寸) 同 六、〇〇〇円
ニ、山桜	(高さ七尺、巾三尺、太き目通二寸) 同 五、〇〇〇円
ホ、ユーカリ	(高さ八尺、巾三尺) 同 一、五〇〇円
ヘ、メタセコイア	(高さ四尺一五尺) 同 一、五〇〇円

二、記念植樹御申込先

關西大學校友課
 大阪市大淀区長柄中通二ノ一二
 振替口座 大阪 一七八七五番

昭和二十六年十月十五日第三種郵便物認可
 昭和三十三年五月三十日発行(毎月一回三十日発行)

關西大學學報

第三〇三號 五月號

關西大學法制史學會 共編
 關西大學經濟學會經濟史研究室

大阪周邊の村落史料

A5判 フランス綴箱入

本書は關西大學図書館に所蔵されている貴重な村落史料のうち、庄屋文書といわれる庄屋の蔵に放置されていた記録を纏めて、法制史及び經濟史は勿論、一般史学やその特殊部門の研究に寄与せんとして公刊されるものである。庄屋文書のなかには、庄屋自身の任命、退役から、触、連、回状、農民の五人組、宗門改、検地、耕作、年貢、水論、新田開発は勿論、田畑建物の売買質入、奉公人、人身売買、縁組、相続、遺言、往來手形、寺送り村送り等に至るまで、百般の法律行為に関する文書までが保存されているので、近世農民の法律および社會經濟生活はこれらの史料によつて明かになるであろう。

第一輯 (庄屋文書)

二二〇頁 頒価 金四〇〇円

既刊

本輯に選んだのは訴訟に関する書類の多い河州松原村、撰州味舌、耳原兩村の庄屋留書である。

第二輯 (耕地、拝借銀、頼母子)

一七〇頁 頒価 金三五〇円

既刊

本輯に選んだのは、農耕の基となる肥料と、その購入資金と入手方法にまつた農民の努力と法律関係、および金融、とくに御発起無尽と称せられる藩政頼母子の運営等に関する書類である。

第三輯 (証文集、村役人)

二二五頁 頒価 金四〇〇円

既刊

(なお御入用の方は大學出版部へ直接御注文下さい)

發行者 關西大學
 發售所 關西大學出版部
 大阪市大淀区長柄中通二丁目